

実践報告

「学び続ける教員像」の理念実現をめざした 養成・育成システム構築の試み

——養成教育と現職研修との有機的接続を促す実践——

An Attempt to Construct a Training System Aiming to Realize the Philosophy
of “A Teacher Who Continues Learning”

中 西 利 恵・木 村 久 男
井 上 律 恵・曲 田 映 世

キーワード 学び続ける教員、教員・保育者養成、養成システム、先生力育成、教育方法

1. はじめに

文部科学省中央教育審議会は、教員の養成、採用、研修の一体的改革を基本とした個別論点や、教職生涯にわたる職能成長を支える具体的な制度設計の構築といった分野を中心に検討し、答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（中教審第184号）」（平成27年12月21日）として取りまとめた。その中で、社会環境の急速な変化や学校を取り巻く環境変化を背景に上げて、「これからの学校教育を担う教員には、その資質能力の多様化及び高度化が求められる」として、「学び続ける教員を支えるキャリアシステム」構築の必要性を提起している。

「学び続ける教員像」の理念を実現するための抜本的改革の方向性として、高岡（2015）は

次の3つを挙げている。①「養成は大学、採用・研修は行政」という「棲み分け」からの脱皮、②高度専門職に見合う「専門職基準」を構築し、その社会的認知を広げること、③養成・採用・研修の改善方策の実施に焦点化した支援方策の確立、さらに、③については連続する職能教育への支援として、養成・採用・研修の各段階の改善課題が示されている。その中で、養成段階の課題として、①教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な学修、②実践的指導力の基礎の育成に資するとともに、教職課程の学生に自らの教員としての適性を考えさせる機会として学校現場や教職を体験させる機会の充実、の2点があげられている。

相愛大学人間発達学部子ども発達学科では、教員・保育者養成大学として、養成段階における上記2点の課題を踏まえ、可能な限り理論と実践の往還を基軸にしながら実践的教育を強化したカリキュラム編成の試みと、「学び続ける

教員像」の理念実現をめざした養成・育成システム構築の取り組みを、平成 27（2015）年度より本格的に実施している。なお、本学科は小学校教諭、幼稚園教諭、保育士、保育教諭の養成教育を担っているため、本報告で使用する「学び続ける教員像」の「教員」には上記の 4 種類を含んでいる。

本学科がめざす人材像は「社会で役立つ実践力のある保育者・教育者」であり、「地域が求める先生力」「確かな先生力」の養成が教育目標である。そして、本学科の学びのキーワードは「つながり合い」「学び合い」である。答申に先駆け、これらの実現をめざした教育方法の研究を学内における研究助成制度を活用して実施している。一つは「先生力を育てるための教育体系構築」を研究テーマとして採択を受けた「相愛大学教育改革経費」であり、平成 25～28 年度の 3 年間で研究を推進してきた。各年度の具体的なテーマを、平成 25 年度（Phase 1）は「主体的学びを重視した先生力育成をめざす新教育改革」、平成 26 年度（Phase 2）は「いま、教員・保育者に求められている実践的指導力の養成」、平成 27 年度（Phase 3）は「学生一人一人の主体的学びとキャリア形成支援システム」と設定し、方策の検討と実践を試みた。平成 29 年度以降は「主体的・対話的で深い学びの実現をめざして－徹底した実践教育と教科横断的な教育方法の充実－」を新たなテーマとして研究を進めている。さらに、「相愛大学研究助成重点研究（A）」においても助成を受け、「地域と連携した世代間交流プログラムの開発と実践を通した主体的学びの体制づくりに関する研究」（研究期間：平成 26～28 年度）を通して、養成課題の改善に向け継続して養成・育成システムの構築に取り組んでいる。

以上のような経緯を踏まえ、本報告では、ま

ず、本学科が取り組んでいる「『学び続ける教員像』の理念実現をめざした養成システム構築」と実践について概要を報告する。さらに、具体的な実践例として、特に養成教育と現職研修との有機的接続を促す取り組み、つまり現職教員・保育者として就労する卒業生と在学生がつながり合い、共に学び合う場づくり（相愛教師の会）を取り上げ、報告する。

2. 「学び続ける教員像」 の理念実現をめざした 養成システム構築の主な取り組み

（1）子ども発達学科での 4 年間でめざす「先生力」養成

本学科では「先生力」を端的に『仲間と共に子どもに学び続け、成長していける力』と定義し、子ども発達学科での学びと豊かな大学生活が「先生力」を育む土壌として肥沃になるよう、カリキュラムマネジメントを展開している。本学科での教員養成において「楽しむ」ことは、先生としてもっとも必要な資質であると考えている。「楽しく、共に学ぶ喜びを感じられる」学級・学校を創ることができるのは、「共に楽しむ」ことができる先生である。そして、「感じる」力も同等に必要な資質であり、「感じる」ことは「知る」ことの何倍も重要である。また、日本の子どもの自己肯定感の低さが問題となっているが、「人と関わる力」の源は「自分を愛すること」であり、「ダメ」な部分も含めて「自分を好き」にならなければ、人と繋がることや「子ども（人）が好き」でいることは難しい。これは本学の建学の精神である「當相敬愛」とも通ずるところであり、「自分と同じ」願いや「ダメ」な部分への共感、短所も含めて自分を認める事から生まれる。本学科

では学びに必要なプロセスとして、「失敗から学び、子どもから学び、人の良いところから学び、そして学ぶ仲間を持つ」をめざしている。

(2) 子ども発達学科の教育方法支援体制

本学科の学びの実現のため、さらに学生の「先生になりたい」夢を支援する学科として、可能な限り実践と理論の往還を基軸にカリキュラムの見直しに取り組んでいる。同時に、学内研究助成制度を活用した教育方法の研究を中心とした学科教育支援体制の工夫を図っている。これらの工夫は、最終的な就職先として教員や保育者を選択しなかったとしても、社会人として豊かに生きる力「人間力」を育むためのシステムでもある。学生の育ちを援助する教育力をもつ学科づくりとして、本学科では「学生観」の共有、「指導観」「教育観」の共有と合意づくりを中心に、図1のような支援体制を整備している。「担当者会」および「主な研究部会」は、本学科カリキュラム編成において特色となる教育方法を展開する科目や学習環境を活用する科目、FDも目的としている科目、学外実習関連科目について授業の展開方法を中心に共同して取り組む組織である。さらに「研究部会」では、工夫した教育方法による実践をまとめ、学会発表につなげている。

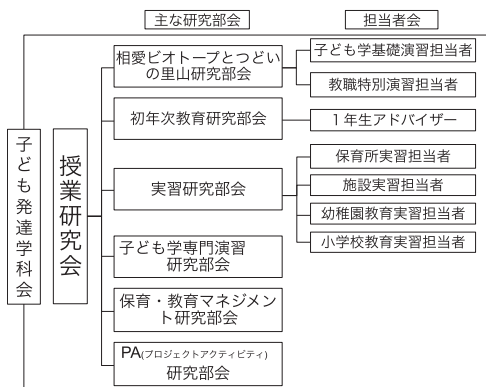


図1 子ども発達学科教育方法支援体制

また、「学び続ける教員像」の理念実現をめざした養成システムとしては、主体的に学びを継続する力を育てるしかけも必要である。このようなかかけは、カリキュラム内教育（正課教育）のみでの展開が難しいため、カリキュラム外の教育システムとして「学びの森」（自主学習教室、対象1回生～）や「夢ゼミ」（保育者採用試験対策自主学習教室、対象：2回生～）を実施している。いずれも、教員が指導にあたっており準正課教育としての位置づけである。さらに、個々の学生の発達や生活課題に即した指導方法の研究も求められる。個別の指導方法については、授業研究会で授業資料等を活用し学科全体で検討を試みている。

3. 養成教育と現職研修との有機的接続を促す取り組み

前述したように「学び続ける教員像」の理念実現をめざした改革の方向性として、「養成は大学、採用・研修は行政」という「棲み分け」からの脱皮が挙げられている。本学科ではすでに、在学生を対象とする養成教育と現職教員・保育者を対象とする育成教育の両方の役割を担ったシステムの構築を検討してきた。そして、現職教員・保育者として就労する卒業生も在学生も双方にとって効果的な学びが実現するよう、つながり合い、共に学び合う実践の場づくりを試みた。以下、養成教育と現職研修との有機的接続を促す取り組みについて報告する。

本システムの核になる実践の場として、「子ども発達学科卒業生が学生に語る会」と「相愛教師の会」を開設した。取り組みは、図1に示した実習研究部会による支援体制の下、小学校教育実習指導室と保育・教育実習指導室が中心となり準備、運営を担当した。大学組織として

卒業生に関する情報を管理するシステムがないため、本学科の「小学校教育実習指導室」と「保育・教育実習指導室」の両実習指導室が本学科卒業生に関する情報収集を担当している。さらに、本学科が展開する在學生と卒業生現職との有機的接続を促す取り組みにおいてもコーディネーター的役割を果たしている。

(1) 「子ども発達学科卒業生が学生に語る会」の取り組み概要

保育士、幼稚園教諭、小学校教諭、保育教諭として現場で働く卒業生と養成現場の在學生が直接交流を通して学び合う場として、平成23(2011)年度より「子ども発達学科卒業生が学生に語る会」の取り組みを開始した。開始当初は年度末の2月に実施していたが、その後実施時期の検討を行い近年は12月の第1土曜日に実施している。卒業生の依頼については、開催年度の免許取得状況や求人状況等を勘案し勤務現場を選定、保育・教育実習指導室の卒業生情報から卒業期が偏らないように行っている。過

去7年間の実施概要について表1に示す。

在學生の学びとして「保育・教育現場で働く先輩たちから学ぼう!」というテーマで、毎日の授業において知識や技術の習得に精一杯で、自分が将来どのような道に進むか、そのためには何を身に付けなければならないのかを考える機会とすることを指導している。保育・教育現場で働く先輩方から、第1部はどのような仕事をしているのか、そのためにはどのような知識が必要になるのかなど、子どもたちから“先生”と呼ばれて生きていく日々で得た貴重な経験談や後輩へのアドバイスを聞く時間としている。第2部は自由に気軽に直接質問したり、話ができるフリートークの時間としている。

現職卒業生には、本会への参加依頼時にテーマを「卒業生が学生に語る」としている趣旨を説明し、それぞれが語る内容の準備を依頼している。開催当日、担当する卒業生全員と実施担当教員とで打ち合わせを行い、準備した語りの内容から小テーマを設定してから「子ども発達学科卒業生が学生に語る会」本番に臨んでい

表1 「子ども発達学科卒業生が学生に語る会」の実施状況（平成23～29年度）

年度	卒業生 (現職)数	卒業期	卒業生の所属と内訳人数	在學生 (受講)数
平成23(2011)	8	1, 2	公立保育所1、私立保育園3、児童養護施設1、乳児院1、私立幼稚園1、公立小学校1	29
平成24(2012)	6	1～3	公立保育所1、私立保育園1、障害児(者)支援施設1、私立幼稚園1、公立小学校2	21
平成25(2013)	6	1～4	公立保育所1、私立保育園2、障害者支援施設1、公立幼稚園1、私立幼稚園1、公立小学校1	49
平成26(2014)	8	2～5	公立保育所1、私立保育園2、障害者支援施設1、公立幼稚園1、私立幼稚園1、公立小学校2	65
平成27(2015)	8	1～6	公立保育所1、私立保育園2、障害者支援施設1、公立幼稚園1、私立幼稚園1、公立小学校2	65
平成28(2016)	8	2, 3, 6, 7	公立保育所1、私立保育園1、私立認定こども園1、施設1、公立幼稚園1、私立幼稚園1、公立小学校2	59
平成29(2017)	8	2～4, 6～8	公立保育所1、私立保育園1、私立認定こども園2、児童養護施設1、私立幼稚園1、公立小学校2	60

る。さらに、本会の後半で実施するフリートークでは直接在学生と交流している。このようなさまざまなプロセスを経ることで、語る側の卒業生にも多くの学びが得られている。

以上の取り組みについては、振り返りシートから PDCA サイクルで成果の検証を行いながら次年度の実施につなげている。

(2)「相愛教師の会」の取り組み概要

平成 23 (2011) 年 4 月から子ども発達学科卒業生が小学校教員として初めて教壇に立つことに併せて、小学校教員として勤める卒業生たちが学び成長し続けるための支援体制を検討した。そして、平成 24 年度より「相愛先生塾」(この時点では仮称、のちに「相愛教師の会」と命名)の開設を試みた。本支援体制では、2つの取り組みを設定した。一つは「先生力育成教室」、もう一つは「小学校教員交流会」である。

さらに、この「先生力育成教室」は「学級づくり入門講座」と「先生力育成講座」で構成した。「相愛教師の会」の構成は図 2 の通りである。

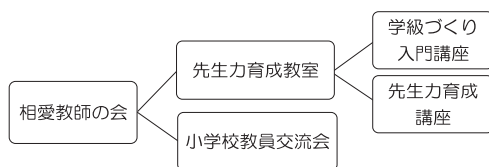


図 2 「相愛教師の会」の構成

① 「先生力育成教室」の実践概要

本支援体制の一つ目の取り組みである「先生力育成教室」では、卒業前、つまり 4 月から教壇に立つ前に「学級づくり入門講座」を実施することとした。また、現場教員となる学生と公立学校講師として講師登録する学生を対象に現場での対応力育成をめざし、上記取組みと同様に

に年度末に「先生力育成講座」を実施することとした。本学科ではこの 2 つの取り組みを「先生力育成教室」と位置付けた。

平成 25 (2013) 年 3 月以降は、本支援体制の実施内容を PDCA サイクルに則って検討し、本支援体制を 3・4 回生にも開放すること、実施回数を「学級づくり入門講座」が合計 3 回、「先生力育成講座」が合計 5 回実施すること、とした。また、小学校教育実習担当者会の教員が『初めて教壇に立つ君に』というテーマで担当するコーナーや若手教員の教育実践に学ぶコーナー、新任の指導教員や指導主事の『若い先生に望むこと』を聞くコーナーを新たに開設した。これに加えて『先輩が語る』コーナーも開設し、本学科の卒業生教員が自らの現状報告を行った。これらの支援体制は、これから教壇に立つ学生だけでなく、実践内容を報告する現職教員や教員を養成する側の大学教員にとっても有効な学びの機会になっている。このような支援体制の下でさまざまな立場の教員や教員をめざす学生が参加し、交流する環境を整備することは、アクティブ・ラーニング型研修としての機能も有すると考える。「先生力育成教室」の平成 25 (2013) 年度から 4 年間の実施状況を表 2 に示した。

② 「小学校教員交流会」の実践概要

本支援体制の 2 つ目の取り組みである「小学校教員交流会」(以下、交流会と記す)は、年間を通して数回の多人数での実施を試みると共に、要望に応じながら柔軟に実施している。本取組みの毎年 1 回目は、本学科卒業生が新卒教員として現場に就職して間もない 4 月に開催している。教員として着任する当初は、新しい環境に戸惑ったり困難を抱え込みやすい時期であるため、1 回目の取り組みでは「初めて教壇に

表2 「先生力育成教室」の実施状況（平成25～28年度）

平成25（2013）年度				
月	日	現職教員数	講座	在学生数
1	29	1	音楽の授業体験と授業づくり講座	10
2	12	1	国語の授業 芦田式の授業研究と教材研究	6
	14	1	音楽の授業参観：A 市立 B 小学校	6
3	1	3(卒業生)	先輩（卒業生の現職教員）の体験①	10
	8	6(卒業生)	先輩（卒業生の現職教員）の体験②	10
	14	3(本学教員)	直前講座	8
	16	4	はじめて教壇に立つ君たちへ	8

平成26（2015）年度				
月	日	現職教員数	講座	在学生数
1	13	1	音楽の授業体験と授業づくり講座	14
2	6	1	音楽の授業参観：A 市立 B 小学校	6
	28	1	教育実践報告から学ぶ	9
3	14	1 5(卒業生)	はじめて教壇に立つ君たちへ	7
	14	3 5(卒業生)	現職教員と先輩（卒業生の現職教員）の体験	8
	16	4(本学教員)	授業づくり	7

平成27（2016）年度				
月	日	現職教員数	講座	在学生数
1	9	5(卒業生)	小学校講師に学ぼう！！ 講師から採用試験合格を目指すために	10
2	5	1	音楽の授業参観：A 市立 B 小学校	4
	27	3	はじめて教壇に立つ君たちへ①	7
3	12	5(卒業生)	はじめて教壇に立つ君たちへ②	2
	12	1(教育委員会指導主事) 7(卒業生)	教育委員会指導主事と先輩（卒業生の現職教員）の体験	7
	14	4(本学教員)	授業づくり	8

平成28（2017）年度				
月	日	現職教員数	講座	在学生数
1	7	5(卒業生)	小学校講師に学ぼう！！ 講師から採用試験合格を目指すために	1
2	3	1	A 先生の音楽室訪問	16
3	4	7(卒業生)	はじめて教壇に立つ君たちへ①	8
	4	2	教育実践報告から学ぶ	9
	11	1(教育委員会指導主事) 7(卒業生)	はじめて教壇に立つ君たちへ②	8
	11	1(教育委員会指導主事) 1	教育委員会指導主事、現職教員、先輩（卒業生の 現職教員）の体験	6
	13	4(本学教員)	授業づくり	6

立った」教員を中心に交流を実施している。夏休み以降になると、抱えている課題がより個別化するため、少人数での実施や個別での実施も試みている。これらの取り組みはいずれも、毎年学年末に実施する「先生力育成教室」に繋がっている。

これらの本支援体制での種々の取り組みが、教員が自ら学び続けるモチベーションを維持できる環境、アクティブ・ラーニング型研修として機能することもめざしている。

交流会は、現役の教員である卒業生らが集まり、それぞれが持つ課題について報告し合う機会である。特に、教職1年目の卒業生の事例は内容が深刻な場合がある。教職1年目は学び続ける教員の基礎力を身につける時期であり、この教職1年目の教員をどう支えるかが学び続ける教員の育成の実現につながる。大きな課題を抱えた教職1年目の教員に対する支援の実践事例について概要を以下に報告する。

相愛大学において2016年3月12日（土）に実施した交流会は「先生力育成教室」と同時に実施し、非常に充実した交流会となった。6つの事例報告が行われ、どの報告からも何度も辞めたいと思うほどの壁に突き当たりながら、それを乗り越えた経緯を聞くことができた。それらの経験は教職に就いたときに誰もが経験する挫折であるだけに、経験を通じて得た内容についての報告から多くを学ぶことができた。これら卒業生の事例報告を聞き、本交流会に参加していた教育委員会指導主事の先生は卒業生の卒業後の成長を目の当たりにし驚かれた。また、教職1・2・3・4年目のそれぞれの卒業生の報告は、その内容や方法において良い意味での教職経験による「歴然とした差」があり、相愛大学出身の教員が現場で成長する姿が確認出来た。さらに、本学科の養成課程で学生たちに指

導してきた「採用試験に合格して先生になることが目的ではない。大事なのは、現場で教員として成長し続ける力をつけること。」が本交流会において卒業生の姿に体现され、卒業生たちがまさに学び続け、成長し続ける姿を見ることができた。

本交流会が、自ら学び続けるモチベーションを維持できる環境として機能していること、さらに、現職教員のアクティブ・ラーニング型の研修の場としても機能していることが実感できた。本交流会に参加していた4回生からは、4月から教員として子どもと向き合うため「どのような実践をしてみようか」とより具体的に考えようとする姿がみとめられた。まもなく教壇に立つという不安を抱えながらも、交流会での卒業生の報告から、どう子どもと向き合うかを具体的にイメージし、実践しようとする決意が感じられた。

(3) 学び続ける教員を支える支援一人間力と学校力を引き出す大学のサポートー

本学科が構築・実践している上述のような種々の「課題を抱える現職教員・保育者」へのサポートは、困難を克服する教育の理論を教授したり、「解決方法」のQ&Aを「指導する」ことではない。「こうすればうまくいく」というような「改善点を指摘する」アドバイスは、たとえ善意であってもこうした困難に直面している教員を追い詰め、苦しめる可能性が高い。なぜなら、「こうすればよくなる」という指摘は、「あなたのやり方が悪いからうまくいかないのだ」ということと同等の意味になるからである。「あなたが悪い。あなたの指導が悪いから。あなたの力がないから。」と指導の未熟さを責められたり、「教師に向いてない」と資質や人間性まで否定されて、追い詰められていく

教員の例がなくなる。

教員・保育者養成大学の教員ができること、教育・保育者養成大学がサポートすることは、現職教員・保育者の置かれた状況を理解して、「先生だって失敗するのが当たり前。失敗の経験が成長の糧になる。」と、子どものために頑張ろうと苦闘している現職教員・保育者を励ますことである。安心して失敗や悩みを出し合える関係を、学校にもそれまで築いてきた人間関係の中にも作っていけるように支援することである。そして、教員・保育者本人が自分だけでどうにかしようと一人で頑張るのではなく、しんどいことは「しんどい」と言える、できないことは「できない」と言える、職場の先生や子ども達、保護者など、周りの力を借りることができる、自分も困っている人がいたら助けることができる教員・保育者を養成することである。「自己責任」の呪縛から解き放ち、地域や「チーム学校」の中で生きていくことが出来るようにすることである。そして、目の前の困難について周りの人々と一緒に考え、子ども理解を深めながら、今自分の本当にやりたいことを見つける手助けをすることである。

4. ま と め

本学科では、組織的に「『学び続ける教員像』の理念実現をめざした養成システム構築」への取り組みを通して、養成教育の質の保証を図ってきた。今後も、教員・保育者の養成を社会的使命として再確認し、課題への積極的な対応と本学科の学びを体現すべく、本システムをさら

に有機的・多面的に更新、活用していきたい。

参考文献

- 1) 中央教育審議会「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申)(中教審第184号)」文部科学省, 2015. 12. 21, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm
- 2) 高岡信也「『学び続ける教員像』の理念を実現する新たな養成・研修システムの構築」中教審初中分科会教員養成部会発表資料 4-2, 2014, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryo/_icsFiles/afieldfile/2014/04/23/1347091_02_3.pdf
- 3) 高岡信也「『学び続ける教員像』の理念を実現するために」教職研修 10号, 18-19, 2015
- 4) 田川隆博「『学び続ける教員』についての論点－二つの中教審答申の検討から－」名古屋文理大学紀要 第17号, 55-58, 2016
- 5) 秋田喜代美「学び続ける教師をいかに育み支援するか(日本教師学会第14回大会講演記録)」教師学研究 13(0), 1-12, 2013
- 6) 村田晋也・小林直人「正課教育、準正課教育、正課外活動」大学時報 No.364, 50-55, 2015
- 7) 河井亨「正課外教育における学生の学びと成長」大学時報 No.364, 34-41, 2015
- 8) 内閣府「平成26年版子ども・若者白書－特集 今を生きる若者の意識～国際比較からみえてくるもの～」, 2014, http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26honpen/pdf_index.html
- 9) ミーケ・ルーネンベルク他著、武田信子他監訳「専門職としての教師教育者－教師を育てる人の役割、行動と成長」玉川大学出版部, 2017
- 10) 上條晴夫「コルトハーゲン教授の教師教育学」さくら社, 2015
- 11) 中原淳監修、脇本健弘・町支大祐「教師の学びを科学する」北大路書房, 2015